
紅娘を潰して

高橋和絵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅娘を漬して

【Nコード】

N4588D

【作者名】

高橋和絵

【あらすじ】

申し訳ありませんが、諸事情により更新を停止させていただきます。

1話：プロモーターはかく語りき

私はイッタイ、ナンのために産まれてきたの？

質問しておきナンですが、ココでは別に、その理由を問おうとは思わない。

タダ、ソレは、私を構成する、アマタもの機構の1つであり、

私の行動原理を決める、その1つであり、

私と言う存在を規定する、その1つのファクター。

ソレ、と言ってしまうのは、

口に出してしまえばあまりにもチープで、

取るに足らない、堅苦しくて、つまらないモノ。

だからあえて、ソレ、とココでは言わせてもらおうと思う。

ソレは、私を定義し、動かし、哀しませ、喜ばせ、恋をさせる。

動物として存在させ、生を与え、死を与え、そしてまた次の世代へと繋がっていく。

永遠とも思える時間流れるソレは、まるで運命のように、私をもてあそぶのだった。

- 紅娘を潰して -

私の名前はアイリーン。

学生で、地方田舎の三流校に通っている。

周りが三流だからか、成績も良いし、運動も万能。

友達は別段多くはないが、それでも嫌われてるとか、そう言うコトは無いつもり。

まあ、でも、ソレはあくまでも同級生の間での話で、

リタイアした父とセットにされ、寒村としたこの土地に押し込められた私は、

都会への憧れか、誰かへの反発か、自己のアピールか、妙にスレた性格をしていた。

自分で言うんだから、それは確かなんだと思う。

成績が良いワリに懐きの悪い生徒、先生にはあまり面白くない存在だろう。

今日も、授業を半分ほどで投げだし、校舎の屋上でちょっと遅い朝食をとる。

それでも成績は落ちないし、落ちなければ文句も言えない、それじゃあ面白くないだろう。

そうやって内心で悔しがってる教師を見るのは、結構嫌いではない。我ながら嫌なヤツだと思う。

学校からの帰り道、エルザは何時も他愛のない話を投げかけてくれる。

『だから、ソレはないって』

何がないって言うのと、私が教師に気があるのではないかという話。

何かと恋事に興味津々な彼女は、時には事実を歪曲して愛に繋げた。

『えー、だって話してたじゃん？ 楽しそうに。私はそんなあんなを他で見たことがないよ』

『別に、タダ質問に行っただけよ、だってさ、そもそももうオヤジじゃない、ナイナイナイ有り得ない』

『またまたあ、知ってるんだよ？ オヤジ趣味なコト』

いや、ソレは断じてない。

断じて。

確かに、私はドルトンのコトは嫌いではない。

飄々としながらも、抜け目無く、

些末なコトに日々神経をすり減らす他の教師達とは違った印象を受ける。

私に対しても態度を崩さないと言うか、私の態度を気にしないと言うか、

ともかく、他の連中にはない、達観した、そういったモノがある、そんな感じ。

『じゃさー、何をそんな楽しそうに話してたの？』

『あんたには、そんなに楽しそうに見えたの？』

『ん、ん。少なくとも、私の持ってきたファーブルを読んだ時よりかは』

『あー、まあ、あれは……悪かったって。趣味じゃないのよ、てゆーかあんたの趣味が異常なのよ』

はね除けた私に対し、彼女はさも当然の如く言っただけ。

結構つき合っただけのモノの、どうにも彼女の感性は理解できなかった。

『ん？昆虫はお嫌い？』

『好きな女学生を、今だかつて見た覚えがない、いや、蝶とかは好きだけども、まあ人に趣味を押しつけるな』

『いや、あたしは、蟲姦までは許容だから』

『おいおいおい、ソレはタダの変態だ、いや、てかまでってナンだ』

『あはー、まあ気にすんなってー、んーまあ、やっぱそんなもんかねえ、別に良いけどさ』

『イイならいいのよ』

『でよ、話を逸らさず、何話してたの？』

『ち……べつつにー』

『別に、じゃないでしょ？さてはそんなにディープなところまで

進んで……』

『違う』

『ふっふー、あんたも興味ない、興味ない言っというて酷いなあー、さてはさっきのも今夜もお約束？』

そうして彼女は、おそらく意図的に、目一杯の不快な笑みを浮かべた。

『ちがーう、違う違う、ちがーうー。解ったわよ、言う、言いますってば』

『おう、言え、言うてみ、洗いざらいな』

『いつとくけどツマンナイからね、そしてソレはあまりにもおかしな話』

『解った解ったって』

『私について』

『って、ソレは、肉体のコトでしょうか？』

『違います』

ドルトンは、確かに変な男だ。

変なことを、理屈っぽく言う、決して理論が通ったわけではないが、私はそう言うのは決して嫌いではなかった。

周囲は結構煙たがっていたりもする。

すでに当然、習慣のようなことではあるが、授業の後彼への悪口がどこからともなく流れ込んでくるのは、

既に慣れたことではあれ、あまりいい気にはならない。

そう言う意味では、確かに私はあいつのことが好きかも知れない。

『アイリーンさん』

『ナンでしょう、先生』

『あなたは、自分が何をしているか、常に意識していますか？』

『いいえ、先生は？』

『残念ながら、私もです』

『なんで……』

『はい？』

『ナンで先生は、そう言うコトを聞くんですか？』

『それは、アレですよ』

『アレ？』

『意識してなかったからです』

『成る程』

『意識してないと、私は乗っ取られてしまいます』

『何に？』

『ソレが解れば苦勞はしません、おかげで私は変な先生と思われる
てしまいます』

『先生は』

『私は？』

『何時も変だと思います』

『そうでしょうか？』

『です』

『不思議なことですが、あなたは、何故そうやって人を傷つける
のですか？』

『傷つきますか？』

『あなたは、解っているはずですよ。あなたは何故人を傷つけるの
ですか？』

『それは』

『それは？』

『ソレはきっと、私も操られているんだと思います』

『何に？』

『ソレが解っていれば、私は先生を傷つけずにすみません。先生は
傷つかずにすみません』

『ですか』

『そうです』

『アイリーンさん』

『はい……なんでしょう先生』

『あなたは、自分が見えましたか？』

『いいえ、これっぽっちも』

広い教室の中での二人きりの会話。
人のいない教室は、どこか寂しく、また何か特別な気持ちを私に抱かせる。

生徒達の喧騒も1つ向こうの世界のようで、区切られたこの空間はまるで私のモノのよう。

降り注ぎ、入り込む翠の光の中、

そして先生は、にこやかに笑っていた。

エルザは一瞬きょとんとして、その後若干2秒ほど考えて、そしてソレは当然の正解といわんかの様にキツパリと言い切った。

『うん、それは変だよ、ヘン、絶好調にヘン』

『それは、まあ、私も、そう思う』

『だけどさ、ソレにつき合えるあんたもそーとーヘンだよ、うん』
『そかな？』

『普通だったら、意味分かんないではね除けるもん、ヘンだよ、変人、変態』

『そうか、ヘンか、てかそんなに？』

『そうだよ』

『そっか』

まあ、確かに自分でもヘンだと思うトコロは結構ある。

ソレがなんだ、と言われればハッキリはしないけれど、

他の人より知ってることも沢山有れば、知らないことも山のようにある、人間ってそういうモノ。

ソレが当然、そう言っしまえばソレまでかも知れないし、個性なんて言葉ほど、曖昧なモノはない。

だけど私はソレを、ヘンだと捉え、そして実のところ、一種のアイデンティティーのように捉えている。

『ねえ、エルザ』

フト私は彼女に投げかける。

『ん？なに？』

『あんたは、好きな人いるの？』

『えーとそれはライクじゃなくて？』

『ラブよ』

『んえ、また急な話だねえ……』

『いや、別に、急じゃ、ない』

『あはー、んー、えへー』

『えへー、でもない』

すると彼女は勘弁したように、

そしてまた、何処か少し申し訳なさそうに答えた。

『あたしはー、駄目だ、まだそう言うの』

『だめ？』

『ん、“好きだ”とか“愛す”とか、そーゆーのは全然駄目だ、

他人の見てるのとか、そう言う話は好きだし面白いケド、自分となると、まだ全然』

『へえ、意外』

『意外？ シツレイな、あたしだってまだ一応乙女よ？ 純白の

処女よ？』

『だって意外よ』

『そうかねー、そーゆーオーラって出てないの？ ホラあたしは清楚な乙女的なオーラが』

『逆立ちしても出ないよ』

と、そこまで言われて流石に撃沈。

そりゃ解ってるケドさー、とか、冗談なんだから乗せてくれてもー、

とか愚痴を漏らすも、

それは流石に譲ってやれない。

そんな感じで強気でいると、彼女は私の質問をまるっきり投げ返して応戦するのだった。

『私？』

『そそ、やつぱりオヤジ？』

『オヤジ違う、私は……アレだ、恋愛中枢とか麻痺してるから、ぶつつり切れてる』

『ああ、だからオヤジ趣味なんだ』

『違う』

『まあ、確かにあんたはアレだ、男を見る目とか無いよね、去年のアレとか』

『ぐうー、ピュアな初恋経験でもあれば良かったのですが』

『ないない、んまあー、あー、くそ、二人して恋愛落第点か』

『そのようです』

『くそー』

季節は、だんだんと寒々してきた。

街路樹は徐々にやせ細り、空気は喉を刺す。

変わり目はゆつくりと、気付かないままに周囲を変えていき、気付いた頃にはもうこんな季節か、そんな風に言う風物詩。

まだ大丈夫、なんて思ってた半袖だったエルザは、

肩を抱いて大きく身震いした。

通学バスに乗り込む私たちを、生暖かな人の空気が迎え入る。

既に周囲は闇を帯び、仕事から帰ってきたようなスーツの男達が、その疲れた表情を露骨に漂わせていた。

何だかんだはあったケド、私も今日は疲れたよ。

イロイロ周りからは言われても、私だって一応がんばってはいるんです。

なのにみんなは冷たいな、私だって、がんばっているんだから。

少しくらいは氣遣つてくれてもイイじゃない。

ばやくウチにもウトウトと、

船を漕ぐように、コクコクと、

私の意識はゆっくりとまどろんでいくのだった。

『んは……………？』

どれくらいの時間が経ったのだろうか。

バスはまだことごとと、走り続け、

外の風景はまだまだ変わり続ける。

田舎のくせに、この町は結構広いものだ。

とつとと近代化してしまえばいいのに、とか、いろいろ思ってみるも、

何年経つてもその姿は変わる氣配がなかった。

まるでボケつとして、立ったまま、まだ半分寝ているようにつらつらとしていると、

そしたらナニか、背中に、固いモノがぶつかる。

どこかの中年の鞆と思い、身じろぎ退かせようとするモノの、ソレは押しつけられるように動かなかった。

この心地よいまどろみを邪魔した罪は重いぞ、

不快感以外の何物でもないソレを手で掴み、その持ち主を振り返った。

『れ…………』

黒いソレの持ち主であるヤツは長い髪を持っており、表情こそ見えないモノのつまりはたぶん女性。

金色のソレは決してくすんではないが、全身をおおうような薄汚れたコートが、その姿を荒々しく映して見せた。

そして、突きつけられていたナニか、その何かは金属で、固く、そして服すらも通すような冷たさを持っている。

女は、笑顔でこちらを見ていた。

ナニも語ろうとはしないものの、

ソレが意図する意味は十分こちらへと伝わっている。

『次で降りようぜ』

と、彼女はそう言うのと、親指でひょいと外を指した。

『ナニ……？』

『お前をエスコートしに来た』

『そんなエスコート……』

『うだうだはいいいからさ、急ぎな、時間がないんだ』

私は慌てていて、私は怯えていて、そして私は混乱していた。

こんな田舎町の、こんな田舎娘にナンの用があるのだろうか。

どれだけ考えようとそれでも現実はず変わらず、刻一刻と迫る次の停車場に、

私の焦りは更に高まっていった。

『え、エルつザ？』

『んー、なに？』

『私はその全てが顔に出ないように、』

モチロンのこと、彼女に危害が加えられないように、必死の演技を

していた。

『ゴメン、あの、あれ、忘れ物した、だから、あれ、次で降りるね』

『え、じゃ一緒に行く？』

『いや、いいよ、いいから、いいから、いいから』

『なによ、遠慮しちゃって、なんか変だよ？』

『いいって、ほんとに』

『どうしたの……？』

『いいからっ！！』

そして、バスが、止まった。

怪訝そうなエルザを振り切り、私は駆け降りるようにバスを抜け出した。

そんな私を見ても焦る素振りすらカケラも見せず、コートの女は追いかけてくる。

私の10歩を数歩で追いかけて、

そして彼女は、私を掴み、ひょいとそのまま担ぎ上げた。

視界がぐるりと一回転し、一緒に意識も引っこ抜けてしまいそう。

それ程の力に、心だけではない、物理的な、そんな恐怖を感じてしまう。

バスの中でエルザが血相を変えているのが、見えた。

だけど、彼女が人を呼ぶよりも早く、

女は走り出した。

『うつし、逃げるぞ』

『何からッ！？』

『そりゃー、あれだよ、天使様からだ』

そんなコトを言う彼女の横顔。

そして私は、ある1つのことに気がついた。

『死にたくなければついて来いよ』

かくしてプロモーターはこう言った。

1話：プロモーターはかく語りき（後書き）

新連載開始となりました。

読んでくださった方々ありがとうございます。御座います。

2作平行での執筆となり、

連載テンポの問題等、多少無計画になりがちな部分もありますが、
どうかおつき合います。

2 話：ベクターはそして世界のために

この村のハズだ。

この寂れた村のどこかに、そいつはいるハズだ。

あたしと同じ、ゴールデンブロードの金髪を持ち、

あたしと同じ、黒真珠のような瞳を持つ、

あたしと同じ、荒れ果てた心を持った少女。

きつというはずだ、この人里離れた寒村に。

アイリーン・リブナット。

あたしが、護って上げないとな。

薄汚れたコートで姿を隠し、人の目を、そして、その中にあるだろ。う天の目を気にしながらの人捜し。

全くもって疲れるし、好きではない。

自宅には行ったが聞く耳持たずの門前払い、

顔を見た途端に怪訝な顔、不愉快な態度をとられ、あっちへ行けと

押し出されてしまった。

あの子もそーゆー親に“当たって”しまったのだろう、まったく、可哀想なモンだ。

この時間帯なら学校かも知れないのだが、それがどの学校なのか、そしてソレは何処なのか、

全くもって知る由もない。

ああ、もう、めんどくさがらず地図ぐらい持って来るんだった。

産まれ持った性格とは言え、何ともならない自分が齒がゆかった。

日もだいぶ傾いてしまい、

顔に浮かんだ焦りもだいぶ色濃くなってきた。

夕焼け空に照る村を彷徨い、その色がこの焦燥とシンクロしている。あたしの態度が悪いのか、それとも連中の頭が悪いのか、村中誰に聞いても、知らん顔で意に聞せず。

無視を決め込むヤツも多い。

人と話す態度がなっていない連中だ、この村ではどう言った教育をしているのか、

我慢強いあたしも流石に堪忍袋のなんとかであり、ソレが切れる前にどうにかアイツには見つかってもらいたいモノである。

なんかもう、こんなコトなら素直に家の前で待っていれば良かっただろうか、

既に辺りは青黒い闇をおび、ホワイトカラーの行列が、バスからずらずらと吐き出されていく。

寒くなってきた村の風に吹かれ、

それが空きつ腹にまで染みて来る気がした。

とりあえずは、飯でも食おう、

必死さの現れなんだが、朝から何も口にしてない、我ながら褒めてやりたいところだ。

何でもイイから適当に突っ込んで、ソレからもう一度家に行ってみよう。

最悪押し入っても連れ出すしかない。

それ程にあたしは焦り、事態は逼迫していた。

しかめっ面で考え込みながら、人通りからそれたカフェに入る。面白いように客がいなく、

薄暗い店内に、到底雰囲気作りとは思えない、嘘のようにか細い灯りがともっている。

湿っぽいというか、カビっぽいというか、

全力で人がいない理由を押しつけてくれた気がした。

もう何でも良いから、食えるモノをくれ、とカウンターの男へと金を放り投げ。

どさり、あたしは疲れているんだ、と全身で表す。

まったくさ、音楽でも掛けりゃいいのによ、

今ならジャズでもクラシックでもご丁寧に聴いてやれる気がする。

そうやって、通りの車の声も届かず、喧騒も届かず、

ただ、イライラする程動きの悪いカウンターの男と、ガタガタと貧乏ゆするあたしの足と、あとは時計ぐらいが、チクチクタタクと動いている。

その時、すべりの悪い扉を引き剥がすように開き、

一人の男が入ってきた。

黒を基調とした紳士的な服装に、品の良さそうな顔立ち、

どちらかという和高貴なイメージの方が強いその初老の男は、

どう考えてもコノ店内では浮いた存在だった。

『いつものを下さい』

そんな科白、映画でしか見たことがない。

初老の男はさも普段から通っているように、そう告げ。

カウンターの男も、解りました、とでも言いたげな顔で店の奥へと消えていった。

『おや』

男はあたしの顔を見て、驚いていますよ、との意思表示。

『んだよ』

『顔に何かついてるか？ とは言わないんですね』

『誰が言うかよ』

『でしよっね』

ナンだこいつ、初対面の挨拶が大層なモンだ。

相変わらず、クソツタレな村だと、繰り返しながらそう思う。

『その席、宜しいですかね』

『席って、ここか？』

『そう、そこです。私はいつも仕事帰りにこのお店に来るんですよ、そして何時もその席に座る、先客がいることは非常に希ですし、その先客がその席に座っていることも非常に希です』

『だから？』

『だから、私はそこに座りたいんですね』

『はあ……』

何だか構うとめんどくさそうだが、イライラする前に自分からどいてやった。

シツレイします、なんて言いながら、男は丁寧に座り込み、そして前を見据える。

『私は、今二つほど驚いています』

話し相手が欲しいのか、このオッサンはあたしに話をふる気らしい。はぐらかすように、んー、と相づちを打てば。

『私は、今二つほど驚いています』

と、繰り返し、一字一句の違いもなくつぶやくのだった。

『だっつ、たく解ったよ、なんだ』

『そう、二つです。一つ目は、先ほど言ったようにこの席に先客がいたことです』

『んで』

『もう一つは、その先客が、驚いたことに、私の教え子とそっくりのお嬢さんと言うことです』

何て言うんだから驚きだった。

『ちよつ、と待て、今……』

こちらの反応を見て、その姿に満足したのか、男はこちらに一瞥もくれず自己紹介を始めた。

『私はドルトン、すぐそこの学校で、教師をしています』

そして男は、前を向いたまま、淡々と、まるで定められた文章を読むかのように、話を進めていった。

あたしはカウンターを叩き、苛立ちを多いに含めた声で男を問いた
だした。

『オケ、解った、何に驚いているのかは解った。だから、その教
え子だ、教え子。ソイツが何処にいるか、ソレを、教えてくれ』

『何故です?』

『何でも良いだろツ、急いでンだよ!』

『まあ、教えて上げないことはないですがー……』

『ならッ!』

『ですがあ……少しー、少し私とお話でもしませんか?』

そう言つて彼はこちらへと向き直り、

ちよつとばかり不気味で、それでいて含みのある笑顔を向けてきた。

『話……?』

『そうです、少しで良いので話してくれば、アイリーンさん、

が今おそらく何処にいるのか教えましょう』

『だからんな暇は……』

『なら、いいですよ、教えませんか』

『がー……わあつたよ、で……何をお話すれば良いのでしょうか、
先生様よ』

『ええ、その前に、ああ、彼女に渡して下さい、私のは後でいい
です』

と、先生サンはカウンターの男に注文する。

カウンターの男は、さも成る程と言つた顔で、あたしの前にコトと
コーヒーを置いた。

『コレは?』

『見ての通りのコーヒーですよ、飲んで下さい、飲まなければ私
は話をしません』

『へいへい』

別に、何か入ってる何てコトはないだろう、

今さっきの話だ、コレで毒でも入ってりゃ逆に褒めてやるよ。

『2、3質問をさせて下さい、答えたくなければそうして下さい、でも構いません』

『おう』

『まず初めに……あなた、いや、あなた方は何によって動かされますか？』

『は……？』

『ですから、あなた方の行動原理とでも言いましょうか、あなた方の行動の目的は？ その理由は？』

イキナリの面食らった感じだった。

問題こそ何処か突飛なモノだが、それでも先生サンは妙に熱っぽく、まるで熱心な学生が教授に問うかのように、あたしを見据えていた。

『哲学は嫌いだ』

『ならば……アプローチを変えます。あなた方、は、あの子をドウする気ですか？』

『ソレを知ってどうすんだよ』

と、あたしはデキル限りの不快感をこめて問をはぐらかす。

その表情を察したのか、先生サンは少しばかりの雲を顔に漂わせ、そしてまた、唸るように続けた。

『確かに答えなくてもいいと言いましたが、出来れば質問に答えていただきたい、アレは、私の大切なモノです、あまり壊されて欲しくはない』

『壊すとは心外だな』

『なら、あの子にも何か仕掛けがされてるんでしょうか、かつてに壊れるように？』

『……お前は、なんだよ？』

『私は教師ですよ』

『ンなことを聞いてンじゃねえって』

『今の私は教師です、以上でも以下でもありません、更についてを言つと、あなた方が何をしようと私は止めません、警察にもタレ込みませんし、新聞局にも、放送局にも駆け込みません』

『……』

『……』

『今の』

『今の？』

『今のあたしはベクターだ、あの子が、運ばれた先はしらね』

『ですか』

『まあ、心配すんなよ、話によれば、スレてっけど良い子だそうじゃねえか』

『まあ、皆さんそう言いますよね』

『……？』

『村の皆さん冷たかったでしょう』

『ああ、あたしまでスレるかと思った』

『みんな、何だかんだ言っであんまり好きじゃないんですよ、あの子のコト』

『……』

『好きじゃない、ソレは違うかも知れませんが、ナンで隠すのか、それは、怖いんじゃないですか』

先生サンは席を立ち、天を見上げるように手を広げた。

『ナニを怖れるよ』

『怖れるというか、畏れるというか』

『何を』

『小動物が、狼を怖がるのと似ていますよ』

『狼？』

『人が、神を畏れるのと似ていますよ』

『アイツが？』

『本当は私だって、怖いんですよ？』

『お前がか？』

『そうです。そうなのですが……怖い以上に、何か凄いですよ』

『凄いです？』

『神との対話？ 神ではないもしかしたらソレは悪魔かも知れま

せん。私はタダの小娘と話しているだけなのに、何かこう、気持ちの良い、魅了される、ソレは一体何か？ 人だって一種の生態プログラムに過ぎない、そして何時だってそのシステムは完璧ではない。彼女には私たちの行動すらも強制させるような、そんな素晴らしいナニかが潜んでいる、まるで魔物か魔法か何かのように」

そうして彼は、一種恍惚としたような表情を浮かべている。

まるで恋人の話をするかのように、

子供へと童話を読み聞かせるように、
全身からの喜びと、そしてそのすばらしさを讃えんとする気迫が溢れ出していた。

『そしてきつと、それは本能なのですよ、人間だって動物だ、牙は奪われ、森から離れても、いまだにソノからだの奥には、血の中には、獣が宿っている』

『獣……』

『おそれて、いるんですよ、自分より強い獣を、猫から逃げるネズミのように、ライオンから逃げるガゼルのように、インプットされてるんですよ、私たちの中にッ、本能的に私は、そしてこの村の人々は彼女を怖れているんですッ！』

『それであたしも、と、そう言いたいのか？』

『だと、思いますよ、この村は閉鎖的で弱々しい、外部からの力がほとんど入っては来ないガラパゴスか何かの絶海の島のような、だから、きつとあなたも、怖れられていたのではないですか？』

『あいつら、みんなが……』

『let sleeping dogs lie みんな、静かに暮らしたいんでしょう、自分とは異なるモノはソレ即ち災いではない』

『ああ、解ってきたよ』

『私が言いたいのは彼女を壊さないで欲しい、これだけです。あの子と話していると何時もそうだ、震えそう、今にも弾けそう、彼女には犯罪者や、狂人にはなつて欲しくはない、タダソレだけで

す。これは私の責任であり、贖罪でもあります』

『そうか、それは、残念だな』

『……………ですか』

『あたし達は、みんな、かつてに壊れちまう、遅かれ早かれ、お前の言う神だか悪魔だかになる、アイツも同じだ』

『そうでしょうか』

『と言うと？』

『いえ、あなたはまだ、完全な悪魔ではない、私はそう思いますよ』

『あたしが…………？』

『ええ、人なつっこく、何処か寂しげで、迷いがある、まだ人です』

『フザ戯るな』

『あなたと一緒になら、あの子は壊れずにすむんじゃないですかね？』

『やめろ』

『あの子を、助けて上げられないですか？』

『なんであたしに…………』

『あの子は、この時間帯、今なら学校から帰る頃でしょう』

『…………』

『メインストリートを抜けるバスに乗ります。5番の停留所で待つて、そこから乗って下さい』

『……………解った』

『多少強引でも構いませんよ、あの子はその方が言うことを聞く』

『ああ』

『最後に、もう一つだけ質問です』

『なんだ？』

『コーヒーは、ドウでした？』

『ああ、うまかったケド』

『本当ですか…………？』

『ん……ああ』

『私は、どうにもココのコーヒーはマズイとは思えないンですよ』

『そうか？』

『私だけではありません、美味しい、そう言うのは、あの子だけです。他の連中は、私も含めてヘドが出ると言います』

『ああ、成る程な』

『では、お願いしますよ、お姉さん』

『……おう』

『私は、もう少し、この不味いコーヒーを飲んで考えとします』
『何を？』

『あなた方のことを』

『照れてやるよ』

あたしは、薄汚れたコートを纏い、立て付けの悪い扉をこじ開けた。
肌寒い空気が、さっとあたしの頬を撫で、
そしてそのまま、路地の向こうへと流れていった。

こうして先生サンは、世界を変えた。

2話：ベクターはそして世界のために（後書き）

かはー、ようやく更新にこぎつけました。

PCのトラブルや、オフでの活動など、

色々あってココまで更新が遅れてしまい、

読んでくださっている方々には本当に申し訳なく思います。

そしてまた、どうかこれからも宜しく願います。

とか、毎回言ってるなコレ……。

3話：ターミネーターは知っていた

天使様？

この女は、妙なことを言ったものだ。

勿論、ホントの天使様が降りてきた、何てコトは思っていないだろうが、

もしそうなら、私をさらっているどころでなくサッサとお脳の医者にかかるべきだろう。

天使様、みたいなのが、私たちを追っかけてきている、言うなれば神罰か？

なんて、まるでバカみたいな話。

彼女の顔を見た際の、その予期せぬ発見により、なんだか恐怖は何処かへ行ってしまう、

拳げ句の果てにはなれなれしくも声を掛けていた。

『で、あなたの名前は？』

『あたし？　ってか随分落ちついてんな』

『どつちかと言えば驚いてるわ』

『すか』

『で、名前よ、名前、ナンにせよ Jane Doe じゃ不便でしょ？』

『んー、リザ…… キュルテンだ』

『リザ？　リザじゃなくて？』

『ん、リザは死んだ。今のあたしはリザ キュルテンですか』

『おう、で、他に質問は？　今ならタダにしとくぜ』

『ではー、あなたはー、私のナニ？』

『ナニって？　何？』

『顔よ、かお、そっくりじゃない、生き別れの姉妹？』

『あ、あーそのコトか、ん、ま、4分の1ぐらい合ってる』

『正解は?』

『異父姉妹、そんな感じか?』

『あー、ナンか解ったかも』

『そか?』

私は、正確には父と母の子ではない。

生まれたときから子供の作れない身体だったお母さん、

そんな彼女が自分の子供を手に入れるために利用したのが卵子バンクだった。

端的に言ってしまうえば第三者の、私の知らないお母さんの卵子と、父さんの精子、ソレから作られたのが私、そう言うコト。

両親にしても、残された最後の手段、と言った感じだったんだろう。とりあえず子供は作ったは良いが、何だかんだで持て余し、

愛情を注ぐも、虐待するも、何もできなかった。

結局は心労も重なり、母は体調を崩し、そしてそのまま逝ってしま

い。
父は、自分と、見知らぬ女との間にできた子供を抱え、こんな田舎に引っ込んでしまった。

と、そう言うコトだ。

『で、さ、ドウするの?』

『どうって、どう?』

『私を、さらって、ドウするの? 居場所も知らない遠い親戚が、ナンの手違いでこんな辺境に訪ねてくるのよ? 一応私にだって生活とかあるし、できれば厄介事にはかかわりたくはないんだけど』

『あ、まあ、ムリ』

『なんでよ』

『えー、そりゃアレだ、言っちゃえば生まれた時点で巻き込まれてるんだよ、何て言うのかね、まあ、それは運命か? 全部手遅れです』

『巫山戯てる』

『まあ、いまさらどーしょーもナンねーよ、生きてるだけ喜びな
『えー、つと、なに、それは、あまり聞きたくないのだけれど、
つまりは私は結構命が危ないってコトかしら？』

『ご名答、あれ、言ってなかったっけ？』

『巫山戯てる』

『だ、か、ら、あたしが来たんだろ、守りにさ』

『あーもー、巫山戯てる、フーザーケーてる、いくら私がまだ
夢見る乙女だとしても、こんな夢みたいないな出来事はいらないわ、願
い下げよ』

『いつてろ、今に蜂の巣どころか網の目状に穴開けられて、血煙
吹いて泣くに泣けなくなるぜ』

『そんなのイヤよ』

『だろ？ だったら、ねーさんの言うことは、聞くモンだッ、ぜ
ッ』

そう言っただけ、彼女は、コートから引き抜いた黒い鉄塊を通路の闇へと
突き刺した。

ばがん、ばぐん、闇夜が一瞬だけど、明るく照らされ、鈍く、そし
て激しい轟音が細い路地に木霊する。

初めて聞いた、本当の銃声、激しいには激しいが、ヒトを殺すには、
あまりにも地味で、寂しげな音だ。

『な、なに……敵？ 天使様？』

『だ……と思う、不味いな、ンなに早く来たか』

『ドウするのよ、守るんでしょ』

『ああ』

『ドウするの？』

『逃げる』

『何処に？』

『んなモンどっかだよ、あたしに聞くな』

『だあ、もう使えないわね……』

『うっせ、うっせ、どのみち足が無くてはなんともなんねーよ、なんで車1つとまってるないんだよこの町は、どんだけ田舎なんだよ』

『盗んじゃダメよ』

『ぬすまねーよ、借りるだけだ』

『何処の子供』

『うっせ』

『ったー………もー、そっちよ』

『そっちってどっちだよ』

『がぁ、もう、イイから、ついてきなさいっ、逃げ道だけはエスコートしたげるわ』

そう言つて私は彼女の手をふりほどもぎ、担がれていた肩から飛び降りる。

沸いて出てきたバカ姉は思った以上に役に立ちそうもないので、仕方がないから私が頑張るのだ。

私だつて一応はこの街の住人だ、道ぐらゐは知っているつもり、逃げる、とは言つても何をすれば良いのかは解らないが、とりあえずは足があれば良いんだと思う。

『トム爺さんのトコロに行くわ！』

『だれだよ』

『誰でもいい、爺さんのところに行けばハーレーがあるわ、走るよりかはマシよね？』

『ああ、マシだな』

『なら行くわよ』

『チヨイ待ち、盗むのか？』

『借りるのよっ』

『何処の子供』

『私は、まだ、子供よ』

そう言つて私は走り出す。

トム爺さんの家は村外れの大きな牧場だ。

昔からコドモたちの遊び場でもあり、以前は私もよくよくそれに混じっていた。

牧場には、爺さんと、豚と、羊と、少しの牛と、ソレから爺さんが昔ぶいぶい言わせていたというハーレーと、あとは周囲の自然くらいしかなかったが、

コドモたちは何かを持ち寄り、何かを作り出し、時にはイタズラをし、日々をソコで過ごしていた。

爺さんは偏屈な人で、周囲の大人はだいたい誰もが多少の煙たさを交えた目で彼を見ていたが、その分コドモへは優しく、その誰へも笑顔で接してくれていた。

全部過去形なのは、とどのつまりトム爺さんがもういないからで、数年前の寒い冬の雪の日に、一人寂しく冷たくなっていたらしい。爺さんが死んでから、私も、そしてエルザも彼の所へ行くことはなくなり、

いつの間にか記憶の片隅へ追いやられてしまっていた。

いろんな記憶や思い出が、あそこにはあるハズなんだけど、

大人になるってこーゆーことなのか、その大半は記憶から抜け落ちてしまっていた。

『で、どこだよ、ハーレー？』

『確か納屋にあったはずだけど、もしかしたら動かない力モね』

『だったら死ぬかもな』

『動いてくれますように』

『まったくだ』

夜の牧場は灯り一つなく、星の光だけが数少ない照明だった。

吹く風に揺れる荒れた野原は、ザワザワと不気味に互いを擦りあわせる。

当然のことながらも、牧場にはすでに豚も、羊も、牛も、勿論爺さんもいなく、

もぬけの殻に近いその姿に、何だか不安感も込み上げてくる、後ろを確認する回数が少しずつ増え、その行為自体が少しずつ、目に見えぬ恐怖を産みだしていた。

幸いなことに、施錠されているような場所な無く、私たちは逃げ込むように、と言うか事実、納屋へ逃げ込んだ。

『あつた……』

埃っぽく、薄汚れた納屋に、ハーレー・デイヴィッドソンはぽつりと残されていた。

その姿に、何故か私は孤独死したトム爺さんの姿を重ねてしまう。

『動くか？ てか運転できるの？』

『わかんない』

『どっち、運転の方？』

『運転は出来るわ、無免許で良いなら』

『あたしがポリか何かに見えるかよ？』

『大丈夫、逆さにしたって見えないから』

『そりゃよかった、日頃の行いのおかげだ』

『たく……行いが悪いから、不味いわね……動かないかも』

『マジか？』

『7割ぐらいマジ』

大きくため息をついたリザが扉の隙間から外を見張り、愚痴るように言った。

『くそ、主賓の到着だ、あたしら牧場で穴あきチーズになるぞ』

『やな冗談』

彼女のそばに駆け寄り、私も一緒に外を覗いてみる。

青い草原に立っているのは、ローマ法王も驚くようなド派手でダボダボなローブに包まれた銀髪の女。

その全身からあふれ出る異様な雰囲気は、リザが天使様と形容するに相応しい気がする。

何がしたいのかは知らないケド、相手のターミネーターも随分とま

た、頭が悪そうだった。

天使様は、きよろきよろと辺りを見回し、私たちを捜している。たぶん。

どんなコスプレ野郎であるにしろ、その威圧感は一圧倒的で、私は自然と息を潜めてしまった。

『もう、ハーレーはいい』

『ん、ゴメン』

『いいよ、とりあえず、その、裏の、そう、そこから外に出て、ああ、逃げろ』

『リザはどうするの？』

『しゃーねーだろに、足止め、すっから、ササッと逃げろ、後から追いかけてやる』

『あー、んー』

『歯切れ悪いな』

『だって』

『ダイジョブだよ、そうそう死にやしねーって』

『コレで死なれでもしたら、あたしだって気分悪いわよ』

『だから、ほら、さっさと行け、死ぬぞ？』

『解った』

足下の悪い納屋の中を、私はゆっくりゆっくりと、奥へと進んでいった。

時々、リザの方を振り返ると、さっさとしろよと、怪訝そうな顔でこちらを睨んでいる。

何だかんだ言ったって、彼女から離れるほどにその恐怖心は増していくようで、

彼女がいたおかげでこの得体の知れないメルヘンを、半端な心持ちで享受できていたのだと理解させられる気がした。

抜け落ちそうな床や、外の小さなざわめきに怯える私の姿は、まるで可愛い女の子みたいだったとき。

扉の前まで到達して、振り返って、そして、リザに向かって。

『リザーツ』

『んだよー』

『死なないでよっ』

『だから解ってるって……』

その瞬間、バチユウン、と何かが弾けるような音が響き、
リザの姿が、消えた。

『あ……れ？』

木屑や、埃なんかが宙を舞い、
壁に空いた大穴から、我先にと月の光が流れ込む。
そしてまた、その光から一歩遅れ、その光を跳ね返しながら、銀色
の髪がさあとなびいた。

『り、りざ……？』

返事が無いどころか、正直、彼女の身体が何処に行ってしまったの
かも分からない。

跡形もない壁が、天使様の持つ、鈍い、銀の光沢をタタえた巨大な
金属の塊によって、うち砕かれたと、そしてまた、彼女もそうなの
かと。

更には自分もそうなのではないかと、私は突如濃密さを増した死の

予感に、立ちすくむことしか出来ずにいた。

『りざ！　嘘！　ホントに、役立たずで、死なないでよ！？』

そんな事は意に介さず、天使様は、ゆっくり、ゆっくりと、私に歩みを向ける。

『無駄ですよ』

『え…………？』

『直撃して、生きているハズがありません』

『そんなの……………』

その冷徹な様は、寒々とした夜の空気も暖かく感じるようであり、そしてまた、その空気達も、彼女を避けて通るようで、空間がうねるように、そう錯覚する程に、私の中で何かが膨らんでいった。

『何の、因果なのでしょうかね……………』

彼女は少し寂しそうに、納屋の中を見渡し、そして、問う。

『アイリーン＝リブナットですね』

鈴のような、澄んだ綺麗な声、透き通るような夜空に、同じく染み渡る。

『……………はい』

『私は、ガブリエル』

彼女のソノ銀色の銃口が、ゆっくりを、私の額にあてられて。

『私は、あなたを救いに来ました』

そしてゆっくりと、その引き金は握られた。

3話：ターミネーターは知っていた（後書き）

読んでいただきアリガトウ御座いました。

タイトルにあるターミネーターは、
皆さんご存じの映画と、

遺伝子用語のターミネーターをかけたモノだったりいたしまして。
まあ、今後いろいろと生かせて行けたらなと、そう思います。

ちなみにハーレー・デイヴィッドソンは、
ダビッドソンの英語発音だそうで、
聞きかじり度合いが高いので非常にお見苦しい限りで。

まあこんなんですが今後もよろしく願います。

4話：エクソンはそして決断した

次の瞬間、弾は私の耳元をすり抜け、天井を穿って空に消えた。

私の頭に、ピタリとつけられていたはずの銃口は、その切っ先を大きく逸らし、天井の穴を覗いていた。

『ば……っ』

天使様の銀の獵銃には、どこから飛んできた出もない鉛の弾が、数発食い込んでいる。

片手撃ちの格好いいアクションでは、その反動を押さえ込むことが出来ず、その先端は何てコトのない明後日の方向を貫いた。

『りざっ……！』

『だから』

『うん……』

『そう簡単には死なねエて』

天使様の表情には、少しばかりの曇りと、チョットばかりのいらだちが見えたような気がした。

『馬鹿な……何て言うなよ、そんなのは、チャチ過ぎだぜ』

舞い散る煙の中から出てきたリザの身体には、当然というかあちこちに銃弾が食い込んでいたのだけど、ソレでも彼女は映画の中のターミネーターのように、顔色1つ変えることなく、天使様と対峙するのだった。

『誰が……言いますか』

ジャコ、とポンプアクション。

そして再びソレを再び構えなおすガブリエル。

天井の穴から流れ込む月の光で、納屋の中はまた少し、明るくなった。

『アイリーン』

『は、はっい』

『今度こそ逃げるよ』

『う、うん……わかった』

『オーライだ』

そうして、リザは私の頬をすつと撫でて、そして銃を構えた。

そんでもって、私は逃げ出す。

今度こそ、振り返ることがないように。

少しばかりの情けなさだが、ふわり尾を引いていた。

実はと言うと、耳元を銃弾が通り抜けたときに私は少しばかり失禁
していた。

実はと言うと、私の下半身はぐつしよりと湿っていて、

何かこう、走るたびに気持ち悪くて仕方がなかった。

逃げるって、何処に逃げれば良いんだろうか、

待ち合わせの場所なんて、決めただろうか。

そもそも、再開するつもりはあるのだろうか。

夜風は、本格的にその鋭さを増し、

空腹に満たされた身体が、なんとなく私を寂しくさせた。

『ならなくていいって』

仕方がないから、腹の音とおしゃべり。

盛り上がるはずもなく、一方通行のソレは、やっぱり寂しい。

ああ、もう、何だって言うのだろうか、

何が面白くて、こんな時間にびたびたのパンツで夜道を逃げ回り、空腹と戦わねばならないのか、

何が好きで、こんな目に合わねばならないのか……。

何というか、やっぱりもう、疲れましたので、

疲れたときは、家に帰ります。

もう、ほつといてくださいよ、今はただ、家に帰って眠りたいです。運命とか、本当の親とか、そう言った何処かロマンチックなことも良いのだけれど、

やっぱりどうして、現実に戻った私には、いつもの白いベッドの方が、魅力的に感じてしまうのでした。

『ただいま……』

力無くつぶやいた私の顔は、酷くやつれていただろう、

まあ、もつとも見てくれる人がいればの話だけど。

パパは、何を見るでもなく、タダ、何も映らぬテレビを見つめており、

電気すらもつけていないその様は、我が父ながら、ハナハダ不気味なモノだった。

『おかえり』……と、チョットこちらを向き、そして、

『後で話がある……』

『ヤダ』

『そうか……』

『……？』

『いや、ならいい』

『そう』

『ああ、後それとだ』

『なに』

『スカート、濡れてるぞ』

『知ってる』

そして私は、自室へと駆け込んだ。

何というか考えることもオツクウで、そのままベットへと倒れ込む。暖かな毛布にくるまれて、その暖かな優しさに、少しばかりの涙をこぼしてみた。

リザ、どうなっちゃんたんだろうか。

いくらタフなあ的女でも、流石にあの変態には勝てないんじゃないだろうか、

だとしたら、負け……死んじゃった？

もし、リザが負けてしまったのなら、そしたらアイツは間違いないココにも来るだろうし、

そうすればたぶん、待っている未来は……。

『一家惨殺とか？』

『随分物騒な独り言だな』

『ぶはっ！？』

リザだった。

私のセンチメンタルな妄想などはお構いなしのようで、どっから現れたのか、マドからこちらを覗いている。

相変わらず体中穴だらけだが、なんかまあ元気そうなので、自然と私も元気にはなったのだが……。

まあ、なんかまあ、納得行かない気もする。

『あ……どーやって解ったの……？』

『ナニが？』

『場所よ、場所、ココにいるってどうやって解ったの？』

『あー、そりゃ』

『そりゃー？』

『アレだよ、あれ、お前のことだからさ、ドロシーみたくお家が

一番つてさ』

『失礼ね』

『事実じゃねーか』

『ウルサイいなあ……』

『五月蠅ければ、帰るけど?』

『解った、解ったわよ、ゴメンナサイ、嘘です、嘘つきました』

『よろしい』

『で、あれよ、あれ、あいつは?』

『ああ、まだ生きてる、だから、さっさと逃げるぞ』

『うん……いや、うん』

『なんだよそれ』

『いや』

『ん?』

『もうイヤよ……こんなの嫌』

『ああ、そゆことか』

『そゆことつて、どーゆうことよ……』

『別に、お前のことだからダダこねるんじゃないかとは思ってたつて、そーゆーコトだよ』

『そう……』

『あれ、反論するかと思ってたけど』

『しないわよ、普段から、私は、恨めしそうな顔してるから』

『そか』

『そう』

何か、居心地の悪い沈黙、私だって、命を捨てる覚悟で家に残りたいとまでは思わない、

だけどさ、こんなのってあんまりだと思う、

急に、ワケも分からないまま襲われて、ソンでもって、命が危なくて、

私が、ナニをやったというのか、と言うかそもそもナニもやってないのだけだ。

何かこんなやつて嫌だ。

どこまで言っても理不尽だ。

『あー、まーまーまー、納得行かないならさ、親父さんでもゆつくり語らって決めるんだな』

そう言ってるのは、バムとドアを開け放つ、ソコには何か、妙に小さくなったパパがいた。

『立ち聞きは、オギヨーギが悪いぜ、おとーさん』

『いや……ああ、すまない』

『ホラよ、親父さん登場、コレが最後のチャンスかも知れないぜ』

『そんな、ホラって言われたって……』

私には、チンプンカンプンだ。
それはパパだって同じ事だろう、だから、ホラなんて言われても困る。
困るのに。

『お前が……』

『……何パパ？』

『お前が何処かに行きたいというのなら、私は止めないよ』

『パパ……』

『情けない話じゃないか、自分の娘が………怖いだなんて、誰に言えるだろうか』

『怖い？』

『そう、ナニを怖がるモノかな、不思議がつて当然だろうよ、自分の血が流れた娘のナニが怖い』

『分かんない、意味分かんないって、そもそもなによ怖いって、私がパパに何かするとも思ってるの？』

『そんなことはないよ、そんなことはない、お前は良い子だよ、私に似ずね』

『………』

『自分の子のハズなのに、まったく似てやくれなしいし、何なんだろうな、説明できない何か怖いモノがお前にはいるような気がしてな……いや、お前にいるんじゃない、お前がそうなんだよ、きつと』

『そんなこと言われたって、私は何も………』

『そうだよ、生まれたときからだった、お前はイッサイ、何も選んではない、これは、きつと運命だ』

『また、そんな馬鹿なコト』

『運命だよ、でなければ宿命だ。私はお前を愛してやりたかったが、どうやってもソレは上手くは行かない、妻が心労で倒れた辺り

から、どうしても、どうしても私は愛すべき娘としてではなく、自分の娘ではなく、その他の、何かから、押し付けられたような、そんな、逃避をしてしまっていたんだ。お前に、お前のせいにして、逃げていたんだ』

『私が、ママとの間の子じゃないから？』

『そうじゃない、そんなハズない。私たちは子供が欲しかったんだ、長年ね。繋がりがじゃないんだ、たぶん……』

『ああ、私が、悪いって、言いたいワケ』

『悪いんじゃないんだ………ただ』

『ただ……？』

『ソコのお嬢さんが……この家に来たときな、私はお前と同様の恐怖を彼女から感じた……そして、思ったんだよ、お前は何なのだろうか、と』

『だから、ソーユー事はあたしに聞かないでよ、私知ってるワケ無いんだから』

『そう……だな、すまない』

『何者か知って、どうする気だったのよ』

『……………』

『いいわよ、もういいわ』

『アイリーン……』

『……別に、いいわよ、別に、そんな顔しなくても』

『だけど……っ』

『もういい。理由がどうであれ、私はパパが望むような子ではなかつたわけだし、だからさ……』

『……すまない』

『だけどさ』

『……』

『……だけど』

『……』

『私は、パパのコト愛してたから』

嘘ではなかった。

パパが、私のことを何処かわだかまりを持って接していたのは、有る程度は感じ取っていた事だし。

心から愛されてはいないのだろうという、一種のあきらめのようなモノも、

少なからずは常日頃から持ってはいた。

だけど、私にとっては唯一とも言える血のつながった肉親なのだし、向こうがどうであれ、愛するのも愛さないのも自由だと思うから。

少なくとも、私はパパのこと、嫌いではなかった。

その時のパパの顔は、今後、そしておそらくこの先一生忘れることの出来ないモノで。

普通の人間だった私が与えることの出来た、最後の笑顔だったのかも知れない。

そして、パパはグツと何かを噛みしめて、目頭をじつと押さえて、

私の手を取り、そしてひと思いに抱きかかえた。

それは、長年躊躇っていた抱擁とも思え、

そして、コレまで17年間の私の人生、記憶に残る最初で最後の抱擁だったと、そう思う。

『リザ』

『お決まりか、お姫様』

『うん……一緒に逃げるわ』

『おーけー、あたしとしても助かるよ』

『うん、それじゃ、パパ、また、ホラ、安全になったら戻ってくるからさ』

『ああ………すまない、待ってるよ。その時はまた、こうやって話せば良いな』

『パパ………』

『私は、まだお前のことを知らなすぎたのかもしれない、事情は

解らないが、今は無事であってくれ、私がバカだった』

『わかったわ』

『ああ、それと、コレを、持っていくと良い、無いよりはマシ
だと思っ』

そう言ってパパは私に小ぶりの拳銃を手渡す。

普段から護身用としてパパの書斎にあったものだ。

『ワルサーか』

『知ってるの？』

『銃ならござれだ、まあ、持つといてソンはないだろうっよ』

『わかった』

『それじゃー』

『それじゃ？』

『まあ、とりあえずそのパンツ脱げよ』

『ああ……………そう』

少し気まずそうな顔をしつつも、パパは『ソレじゃあ私は寝るよ』
と腰をぐぐつと持ち上げた。

そう言えば私も、パパとしっかり話したコトなんてあまり無かった
な、と少しばかりの後悔の念が押し寄せてくる。

やっぱり、ちゃんと生きて帰ってこよう。
もう一度、ハグしてもらえるように、パパと分かり合いたかった。
多分、私はパパが朝起きるまでにはココにはいないだろう。
だけどパパはソレを知りつつも、あえて何かを言おうとはせず、
最後にチヨット私の顔を見て、そして部屋を出ていった。

その直後、パパはドアを突き破って部屋に帰ってきた。
お腹から白い手を生やして、帰ってきた。
ソノ白い手には、丸くてごつごつした鉄のパイナップル。
キツ、とソノ安全装置が空を舞う。

『伏せろ！』

私に覆い被さったリザで、その爆炎は見えなかった。

4話：エクソンはそして決断した（後書き）

後書きですね。

今回も読み進めていただきありがとうございます。

んー、この作品は多分漫画を結構読む方ならもしかしたら解と思うのですが、

私はブラックラグーンとかの作品が好きなので、

アウトローな感じのモノを書くときは、

スラングというかジョークというか、

そう言った感じのしゃべりのテンションをかなり影響受けて書いています。

まあ、もっとも正式なスラングの知識などはまったくと言って持ち合わせていないので、

パクリと思われれば嬉しい、それ程にかなりめちゃくちゃで、格好のつかないモノになり果てていますが。

ですがまあ、そう言った一言の科白に、

かき集めた乏しい知識をフル動員してみたり、

その一言のためにわざわざ辞書を開いてみたりと、

そう言った調べモノもまた、作者側にしかない楽しみ方の1つではないかと思い、

コレからも出来る限り気の効いた科白と言いますが、
そういうモノを喋らせられたら良いなと思いますね。

ただまあ、普段からそう言うのを好きこのんでない人には、
何カッコつけた馬鹿みたいな、で終わってしまいますし、

本当に好きな人には、私の未熟さが露呈するばかりと、

まさに茨の道で御座います。

まあ、こういうジョークって偏ってる専門知識が露骨に出やすい所かも知れませんが、
もつとも、オタクスラングの方が使いやすかったりするかも知れませんが。

引き続き読みにくい作品ですが、どうかよろしく願います。

5 話：スプライシングは実行されて

部屋の中は大きく吹き飛び、それはあたしやアイリーンにとって
も同じ事。

覆い被さられたことでアイツは大丈夫だったけど。

手榴弾より吹き出した鉄片が、あたしの身体にも至る所に突き刺さ
っているのが解った。

そしてソレは、爆発の中心にいたアイツの親父も同じ事で、いや、
同じなどじゃない、ソレはともアイツに直視できるようなモノ
ではなかった。

『い』

叫び声は喉に詰まり、身体の外に出ることすらできないようで。
その代わりに、吹き上がる吐瀉物がその隙間を埋めてしまった。

アイツの親父を殺したヤツ。

ソイツは部屋には入ろうとせず。

無くなったドアの付近から、拳銃だけを室内にさし込みこちらへと
打ち込んでくる。

何発かが身体にあたり、鈍い音を立てて、あたしの中にとどまった。

『アイリーン！おい、アイリーン！？』

眼には焦点が無く、身体には力が無く、肌には色がない。

親父さんが吹っ飛んで、一緒に正気も吹っ飛んでしまったようで、
いくらゆするうとも奇妙な叫び声と、吐瀉物だけが帰ってくるだけ
だった。

『つたくそ、ふざけやがって……』

何発かの仕返しを打ち込んで、あたしはアイリーンを抱えてマドか
ら飛び出した。

底の抜けたような奇声を上げるアイリーンを意識しつつも、ソレを

気にしていることもできそうにはない。

兎に角今はこの場を離れないと、

こいつがこんな状態では、応戦することすらままならないわけで、あまりにもよい状況とは言えない。

『りざ……』

『おう、話せるか、ダイジョブか？』

『家の、裏に、キャンピングカーがあるから、お父さんの……』

『おう、わかった』

『ちゃんと、生きて帰らないと、お父さんと、話せないから……』

『ああ、そうだな……』

『お父さん、待っててくれるよね？』

『そう思うぜ』

『だよね』

なんて、誰にでもなく自分に言い聞かせているようで、あたしまでなんだか妙に切なくなってきた。

キャンピングカーは言うとおりのそこにあった。

埃にまみれているモノの、モノ自体はとても綺麗なモンで、

あまり使われるコトがなかったんじゃないかと、

なんだか余計なことばかり頭が働いてしまう。

あいつは、あの親父にコレでどっかへ連れてってもらえたのだろうか、

とか。

キーは無かったので壊させてもらった。

エンジンがスムーズに滑り出し、間髪開けずに本体も滑り出す。

コレなら何とかなると、あたしにも少しだが余裕が生まれていた。けどまあ、世の中には随分と足の速いヤツがいるもので。

行く先には既にアイツが待っていた。

ホントにもう、タチが悪いとしか言いようがない。

一発目は、フロントガラスにめり込んだ。

二発目は、大きくマトをそらし。

三発目は、タイヤ付近のコンクリをえぐる。

四発目が、車体にめり込んだ所で、ヤツは目と鼻の先にいた。

『ひッッたりやああ!!』

がッ、とかではなくて、ズン、とかでもなくて、
ベコン、と言う感じに、あたしは天使様を轢き潰す。

羽根が舞ったりはしないモノの、車体が浮くほどの衝撃が突き抜け、
それは確かな手応であるべきだった。

まあ、だが、実際は、ソレとは随分異なっていた。

『ど、どう、やっつけた...?』

『ん... やっつけてない』

『だって、轢いたんじゃない?』

『轢けてない』

『なんでよ』

『なんでもだよ... くそ、張り付かれたよ!』

大きくへしゃげた助手席には、まるでめり込むように天使様が乗り
込んできた。

あまりにも荒つばいヒッチハイクに、あたしも目を丸くするばかり。
ズボと車体にめり込んだ腕を引き抜き、

『逃がしませんよ』と粘着質な一声。

押しつけられた拳銃を弾き、代わりに数発撃ち込んだ。

『アイリーン、ハンドル頼む！』

『ぶ、ムリよ……！？ 操縦何てしたこと無いから！』

『いいんだよ！ 止まらなければ！ 目的地は何処でも良いから！』

『わかった、やってみる、けどっ』

『なに？』

『ミスってもお咎めはナシで』

『わあっ たつて』

天使様は距離をとり、車体の屋根に陣取った。

バックには青い夜空が広がり、頭越しに月明かりが彼女の輪郭を縁取っている。

そして彼女はおもむろに、これからが本番だと、そう示すように、ダバダバとした法服を脱ぎ去った。

中から出てきたのは真っ白なライダースーツのような、そんなモノ。身体のラインを強調するようなエロティックな作りに、

魚のような細かな鱗片がちりばめられていた。

そのそれぞれが微細な光りを写し出し、反射し、身に纏う。

ソレはまるでからだ全体が青白く発光しているかのようなそんな光景、全身を輝く羽毛が包み込むようなそんな光景だった。

まあ、もつともものコト、ダダ目立ちなのは当然なのだがね。

『いーじゃん、いーじゃん、やってやんよ』

スポロポレニン・スキン。

仕掛けはワリとは知れていた。

穴だらけになったコートを脱ぎ捨て、

アイツとは正反対な真っ赤なスーツに衣替えて、車体のリングへと上った。

あたしの腋には7丁のAMTハードボーラーが、まるで露店の景品のように吊されている、

なんで奇数なのかというと、その8丁目がアイツ手元にあるわけで、先ほどもみ合った際に奪われたモノだった。そして二人は、同じ拳銃を持って、車の上でにらみ合っのだった。

先に動いたのはあたしだ。

決して辛抱がないわけではないが、いろいろ好き勝手をされて待っているのも性に合わないモンだ。

相手との距離を一步步、至近距離から頭部を狙う。

狙いこそは正しかったモノの、銃身をハジかれた弾は耳をかすめて明後日へ飛ぶ。

力の抜けた腕から銃はかすめ取られ、これで6対2、見た目重視の彼女は、すぐさま両手に構え、再びにらみ合うこととなった。

『いや、てか、とんなよ』

『良いじゃないですか、沢山持つてるんですし』

『そーゆー問題じゃねー』

『あなたの、お姉さんもそうでしたよね』

『なんだよ……』

『今回のクライアント、彼女なのでしょ？　いつも懐に貯えたがる、彼女は何を考えてるんですか？』

『そんなこと知るかよ、今のあたしは……』

『ベクターですよ、それはそうですね、部外者でいる方が気が楽でしょうし』

『んだと……』

『ホントは、知ってるんじゃないんですか？　彼女が何故世界中から自分の家族を集めているのかも、そして家族みんなで何をしようとしているのかも』

『……何にも知らないで、肅正気取るヤツには言いたかないね』

『じゃあ、私知ってますよ、アレックスⅡホイットマンの本当の』

目的

『……』

『知って、ますよ』

『ソレがどうしたよ』

『知りたがらないんですか……？』

『あいにくな』

『ですか』

『ああ、おしゃべりはお終いか？』

『ええ、今のところは、喋りたいことには興味を持ってもらえませんでしたしね』

次ぎに動いたのは向こうの方だった。

両手の銃が火を噴いて、幾筋かの閃光があたしを激しく突く、
躰に走る電撃のようなソレは、

もはやあたしには心地よいようなモノで、

それは、また、あたしの心を沸き立たせていった。

躰にめり込む弾も、めり込まない弾も、

それら全て、有る無しを関係ナシに。

あたしはそのまま相手の躰へとぶつかっていった。

肉を切らせて、ではないが、

必要なのは、相手をやる一撃それだけで、

足場おぼつかぬ月下の決闘は、何てコトのない体当たりがその一撃
となった。

天使様の躰は文字通り空を舞い、脚はリングから離れた。

車から落ちることこそ無かったモノの、この時点で勝負はついた。

車両の後部へしがみついたソイツの手をあたしは小気味よく踏み躪
った。

『ざーんねんだったな』

『……ですね』

『あーこれ、なんだ、あれだ』

『なんですか？』

『アイツの親父の、弔いだ』
キンツ、と、またピンの抜ける音。

あたしはソイツの手元にソレを置いて、押し潰れた助手席へと駆け込んだ。

『あ……リザ、無事?』

『ああ、無事も無事』

『アイツは……?』

『んー、それなら……』

と、そこで爆風が吹き上がり、車体前面がどうと浮き上がる。
少しの浮遊感の後に、運転席は再び地面へと戻ってきた。

我ながらのナイスタイミング、ナイス演出。

『と、こうだ』

『何も、車まで吹き飛ばさなくても良いのに』

『まあ、色々あんだよ』

『……?』

『それよか、運転できてるじゃん?』

『んふ、まあ、ゲーセンの賜ね』

『でっすか』

『じゃー、このまま運転頼むわ、とりあえず進路は南、海を目指
していざススめ』

『いえっさー』

『よーし』

『あー、あとさ』

『なに?』

『途中……服買つて良い?』

『なんで?』

『あのさ』

『どのさ?』

『いや、今はいてないのよ』

『何を?』

『…………』

『黙んな』

『下を…………』

『あ、あ……………』

『脱いだときに襲われたから…………』

『んー、まあ、あれだ、気にすんなよ』

『随分な対応ね…………』

『や、だって、まああたしもはいてないし』

『なに、そのタイトの下…………？』

『おう』

『…………まあ、なにかしらね』

『うん、なに、ブロンド美女二人の南へ向かうノーパンの旅って
コトで』

『多いに容認しかねます』

街を抜け、荒れ地に残された廃ガソリンスタンドでその日は夜を明
かした。

とは言っても、既に空は白みだしていたので結局二人して、
昼近くまでガツツリと寝ていたのだが。

あたしが横になって、静かになると、

アイリーンはゆっくりと立ち上がり、朝と夜とが入り混じった空を
見て、

嗚咽を隠すことなく泣いていた。

泣きたければ、泣けばいいとは思うけど、

あいつは、誰に隠すでもなく、声に出すようなことはせずに、
ぐえ、ぐえ、と、

むせび泣くだけだった。

愛されないのは、あたしらのサガだし、
愛している者に、逃げられるのも、あたし達のサガだと思っている。
サガって、ある意味逃げただけ、

どんな状態でアレ、何かしらの形を付けないと人間というのは不安になるモノで、

私たちもこうやって、

愛してもらえない生き物として、

1つの纏まりを得て、何か一種の連帯を得て、

ソレでとりあえずの安心をしていた。

でもさ、だけどさ、やっぱり愛されないのは辛いと思う、

人間誰だって、そうなんだと思う。

それは、そう、人間を愛している者ほど、

その辛さは、耐え難いモノとなって押し寄せてくる。

我らは恋する、

ソレも片想い、

人間という生き物に、

片想いする生き物。

ソレはモハヤ生まれてきたときからの運命で、

あたしという存在がある以上、

どうしても否定できないことなんだと思う。

『泣いてるか?』

『……………別に……………起きてたの?』

『まあ』

『そう』

『まあ、あたしも泣いたよ』

『涙腺ついてるんだ』

『失礼な……』

5話：スプライシングは実行されて（後書き）

はい、最近テンポ崩れすぎですね。

読んでくださった方々ありがとうございます。御座います。

今回はおそらく初めてっぽい戦闘シーン。

戦闘描写なんて書けるか！

とかどうしても思ってしまうので、全体的にも戦闘、と言えるものは少な目かと。

虐殺、一方的な殺人の方が描きやすいのですよね。

そもそも現実には戦闘何て言われても何をしたらいいモノか、せいぜい殴り合うのが関の山かと、あまりやっちゃうとソレこそ噓っぽくなっちゃいますので。

（既に嘘の塊のような作品ですが……）

まあ、そんなこんなで淡泊かつエネルギーギッシュな戦闘を描写できれば良いかなと思います。

ちなみにAMTハードボラーとは銃の名称。

映画でターミネーターが使用していた銃としても有名かと。

まあ、好きなのですが詳しくないと言う、よくいる浅いファンなので、

あまり兵器知識とかを掘り下げるのは自殺行為かとは思っているのですが……。

と言うわけで読み進めてくださった方々ありがとうございます。御座います。これからヨロシクお願いします。

感想とかもどしどし応募しております！

6 話：シークエンシングは仕組まれていた

携帯がナっている。

気がつくともどりは明るくなっていて、
と言うか既に日は高く昇っていて。

辺りを見回し、ようやくソコが寂れたガソリンスタンドであることに気付いた。

何だかもう、全身が怠くて、なーなーと出るのをこまねいていたら、
程なくして携帯は静まり、残された荒野の風だけが私の耳に響いてきた。

『おう、起きたか』

『リザ……おはよう』

『もう昼だ』

『みたいね……どうやら、昨日の出来事は夢じゃなかったみたい

……』

『ああ、そんなオチは願い下げだよ』

『私は、そちのオチの方が良かったかも』

『悪かったな』

『んー、まあ、私はどうしようかな、タッター一人の身内も、いなくなっ
てしまいましたし』

『悪い』

『いや、別にそう言ったつもりじゃないけどさ……』

『……………』

『あ、そうだ』

『どした？』

『お腹空きました』

『ああ、成る程な』

『とりあえず、飯を食って考えましょ』

『おーらい、そうしよう』

そんなわけで、リザと二人、中破したキャンピングカーから机を引っぱり出し、とりあえずのランチタイム。

彼女が仕入れた、様々なコンビニ食品に囲まれて、安っちくはあるがとりあえずは彩りのある食卓となった。

『牛乳ちょうだい』

『あいよ』

『で、どうするよ』

『まあ、待つてよ、私だつて聞きたいコトばかりだし、そう焦る必要だつて無いんじゃない？』

『まあな、牛乳ついてるぞ、□』

『んむ……』

『で、まあ、何が聞きたいんだ？ 人生の進路相談といこうじゃないかよ』

『んじゃま、とりあえずアイツは？ 殺しちゃったの？』

『ガブリエル？』

『そう、あのヒッピー天使』

『さあ』

『さあつてなによ』

『いや、まあ、爆死してるカモだし、してないカモだし』

『この状態で、エラくアバウトね』

『んまあ、なあ、どうなったかは見てないからわかんねーよ』

『ん、じゃまあ生きてるか、と？』

『てか生きてンじゃね？』

『うん、そんな気がしてきた』

『まあ、追いかけて来てつかもな』

『あたしが言うのも変だけど、チャント仕留めなさいよ、あいつは……』

『まあ、な、悪い……』

『ん……』

『てか、牛乳』

『おん……』

『まあ、現状ではわからねーな、路上で四散してる力モだし、もしかしたら今やってくるかも知れない、と。ワカラン事は悪い方に考えて置いた方が何かと得だぜ』

『あー、頭痛いわ』

『ほい、お次の質問は?』

『あーどうしょ、えー、なに、リザはあたしをどうしたいの?』

『妹にしたい』

『えー』

『嘘だよ、嘘。露骨に嫌がんなよ、傷つく』

『いいよ、傷ついてても』

『がー、まあ、なんだ、もういいよ、あたしは運び屋だから、お荷物を、クライアントの所へお届けする、と、だから別にどうしたいわけでもない』

『するつてーと、クライアントサンがあたしに用がある?』

『そうじゃねーの? まあ、他のお仲間にも集まるように、つて、て言うか集めてるケドさ』

『へえ、何かしらね、懇談会でも開くつもり?』

『しらねえよ』

『んー、まあ、とりあえずソレは良いわ、それよか、さ』

『なに?』

『リザって運び屋さんだったの?』

『何に見える?』

『犯罪者』

『んーまあ、間違っではないけどさ、印象でこうも言われると傷つくワー』

『ああ、マジなの？』

『まあ、どつちかというフリーランサーだけどさ、実質犯罪者の方が近いカモよ、“ノスフェラトゥ”なんて異名までついててさ』

『うわダッサ、何、そんな異名振り回して真っ赤な全身タイツでドンパチやってるワケ？フリーランサーってのはどいつもこいつも映画の見過ぎな奴等バツかなんだ』

『ちよーっと、待てよ、異名ってのはあたしじゃなくて外部が付けるモンだつて、それにだな……』

『ナニ……？』

『いや、まあ、そんなには……ダサくない、と思う』

『ハイハイ……』

まあ、解らないことは山のようにあれど、少しずつではあるが私にも自分の立場が理解出来るようになってきた。

私はまだまだ危ない立場にいるだろうってコト、リザがどういうヤツで、やっぱり馬鹿なのだというコト、そして私がこの先どうなるのだろうかと、そーゆーコト。

だけど、まあ、まだ肝心なピースが抜けているわけで、コレが解らない限りは私はどうにも納得が出来ない。

ソレはパパのことだつてそうだし、ガブリエルのことだつてそうだ。納得してやるわけには行かない。

『ねえ、リザ』

『ん？』

『それじゃあさ、あたしって何なの？』

『んー』

『んー、じゃなくて』

『あー』

『リーザー』

『わあつたよ』

そうしてリザは椅子に座り直し、
テーブルにどつと手を組んだ。

その視線は何処か、いつもの彼女とは違う気がした。
そんな気がした。

私の名前はアイリーン・リブナットだ。

年は１７歳。

ゴールデンブロンドの髪と、黒真珠のような瞳が自慢である。
母は既になくなっていて、ちよつと前までは父と一緒に田舎町で暮らしていた。

少しばかりスレてはいるケド、普通の女の子である自信はあつたし、
そもそもそんなことは意識すらしていない。

それ程に、一介の、ちよつと反抗的な、田舎娘であつたハズだつた。

『お前も、あたしもさ、普通の人間だよ、生物的な意味ではな』

『だつたら何なの？』

と、聞き返すのだけど、彼女は答えを選ぶように、
と言つか、言うべきかを選ぶように、

空と地とを交互に、行ったり来たりと見回していた。

そして彼女は私に、お前の遺伝子上の母親は、と、そう聞いてきた。
私の母親は、サラ・ジェブリン。

確かイギリスの学者サンだつたハズだつた。

私の母親がサラなら、彼女の母親もサラで有るべきだが、
実際は少し違っているみたい。

『かー、あたしの場合はコニーだつたかな』

『コニー？』

『そう、コニー』

『私たちのママって同じ人じゃないの？』

『ああ、同じだぜ。サラもコニーも、みんな各地の卵子バンクに残された同一の人物だ』

『えーつまりは……偽名ってコト？』

リザの返答はご明察。だった。

私たちの母親はサラでもなければ、コニーでもないらしく、その実母、名前をハルハワーと言う、は大手卵子バンク各社に自身の身元を偽って登録されているらしい。

『そんなこと出来るの？ てか、そもそも何のために？』

『どうやったかはー、まあしらねーケド、事実そうだから仕方がない。目的もー、まあ、わかんねーんだけど、まあ、今となっちゃ仕方がない』

『なによそれ』

『ホントなんだろうな、タダの酔狂か、何か他に目的があつたのか』

正直なところ酔狂で産まされちゃたまないのだけだね。

ハルハワーは名高い生物学者だったらしく、その能力は特に遺伝子分野にかけて天才的な才能を持っていたらしい。

天才様の考えるコトなんて解らないケド、結果的には彼女の血は全国へとしぶきを上げて広がっていき、そこから数多くの、子孫が産まれている。

それこそ、私やリザみたいに。

『で、結局ナンなのその人は？』

『んー、まあ一言で言うとか人か？』

『狂人？』

『あー、一度は冷え固まってきた中東とスエイツに油をそそいだ張本人だ』

『それって、世界大戦……？』

『そう、WW3の立て役者と呼ばれた犯罪史の常連だよ、あたし達のママはな』

『んー、つまりは、だから、私たちも……ってー、そう言いたいワケ？』

『まあ、そうかな』

『私は、大丈夫よ』

『どうかな』

『……証拠は？』

彼女が言うには、ソレは仮説ではなく事実らしい、全ては統計結果がモノがたり、彼女の子供のうち80パーセントは15歳のバースデイまでに銃を持ち、70パーセントは20までには殺人を犯している。25までにはほぼ100パーセントとなる。

そんなの、確率の話と言うけれど、確率ほど確かなモノはないように、

全ての家族達が人を殺めてきた記録には、決して逆らうこと何て出ない。

私には狂人、殺人鬼、虐殺者、そんな血が流れている。

『そんなこと、急に言われても……』

『まあな、勿論殺人〃狂人って、そう言うわけでもないしな、たださ』

『ただ？』

『普通じゃないってのは確かだよ、あたしも、あんたもな』

『ん……』

『まあ信じられない、ってー顔だよな』

『うん……』

『しゃーないよね、まあ、あたしもそうだったし』

『リザも？』

『ああ、何をしたわけでもナイのにさ、あたしの人生イキナリ全部否定されたみたいでさ、産まれた瞬間から否定されるためだけに生きてみたいで、誰に対して怒ったらいいのかも解らんなくてよ』

『だよな』

『まあ、だからお前にもさ、あんまり言いたくなかったんだケド』

よ
『』

『ゴメン……………アリガト』

『どーいたしまして』

『うん……………』

まあ、正直なところは信じ切ってはいなかったし、リザを信じないわけではないケド、自分のことだから、何を信じるかぐらいは自由であつても良いと思う。

アイリーン「リブナット17歳。

早くも、自分の限界というモノが見えてきたような気がして、少し未来が暗く見えました。

人間誰しも、得手不得手があるように、私たちもまた、産まれたその時から、生きることには不得手な生き物であり。

もし、こんな風に産まれていなければ、そう思うコトは、今の私を否定してしまうと言う、悲しいことになってしまう。

何か凄く、ズルいけれど、ソレが人の人生、そういうモノなのかも知れない。

だから、今は、やっぱり、少しズルいけど、誰かを、他の何かを恨むことで、変わるこの出来ない私を、慰めて上げるしかないんだと思う。

ゴメンナサイ。こんな子で。

『どうした、ダイジョブか？』

何か、やけに優しくしてくれるリザに、申し訳ない気がする。

『ダイジョブ、うん』

『まあ、適当に食って元気だせよ、ほら、牛乳ももつと飲め』

『うん……………』

私は、優しいリザがあんまり好きではなかった。
だから、ゴメンナサイ。

携帯がなっている。

気がついた私は少し躊躇いながらも、ソレに出た。
相手は、エルザだから。

『あ、アイリーン！？ 無事、生きてるの？』

『うん、大丈夫だよ』

『良かった……元気ない？ 大丈夫？ 今どこ？ 変なコトされてない？』

『そんないっぺん……』

『あ……ゴメン、ナンかさ、家の方でも爆発があったって聞いたし、あれから行方も解らないって言うからさ、何度かかけたんだけどさ……』

『ありがと……ねえ、エルザ』

『何？』

『私のこと、怖い？』

『……』

『どう……？』

『……ナンで今になって聞くのかなあ……』

『やっぱり、怖いんだ』

解つてはいたんだけどね、とりあえず、みんなと別れる前に、ソノ胸中だけは聞いておきたかった。

『うん、怖かった、かな？』

『うん？』

『今はもう、怖くないよ』

『……ほんと？』

『うん』

『なんで……？』

『ナンでもナンで、初めはさ、ナンか怖かったけどさ、威嚇されてるって言うか、襲われそうって言うか、凶暴そうって言うか』

『失礼ね……』

『まあ、まあ、でもさ、いざ話してみればさ、アンタもタダの小

娘だったわけだ』

『……』

『勉強はキライだし、好き嫌いは激しいし、悩み事も多いしさ、何ら変わらない普通の学生だったと』

『……』

『自分のためにも、人のためにも泣ける子だし、あたしはそう言うヤツは悪いヤツだとは思わないよ』

『ありがとう……』

『なんで？』

『なんでも』

『そう、どういたしまして、まあ、人間みんなそんなモンだって、アンタわりと自意識過剰だったりするしさ』

『まあ、うん』

『いや、まあ、ね』

『私、さ』

『ん？』

『しばらく、街から離れるからさ』

『あー、ん……』

『寂しい？』

『寂しいです』

『そっか、ゴメン』

『まあ、さ』

『なに？』

『色々忙しいのは解ったよ、とりあえずあたしは無事ならそれで良いし、別に監禁されてるとか、銃突きつけられてとか、そう言うコトは無いんでしょ？』

『うん、ダイジョブだよ』

『……んー、まあ、その様子なら、ってさ、だから、ゴタゴタがすんだらまた帰ってきてよ』

『勿論、そのつもり』

『よし、ならあたしからは言うことはない、えーっと、警察とかには言わない方が良いの?』

『じゃあ、うん、多分』

『解った』

『じゃあ、さ』

『ん』

『行ってきます』

『おー、行つてらっしやい』

こうして、私は街を出た。

本当に、帰つてこれるのは解らない。

それどころか、私が普通でいられる保障も何処にもない。だけど、戻つて来れたら幸せだと。

何事もなく、エルザと笑いあえれば、ソレは私の人生が、まだ決められたモノではないと言うことが、証明できるんじゃないかと、そんな気になっていたのだった。
さようなら、エルザ。

6話：シークエンシングは仕組まれていた（後書き）

こんばんは、毎回読み進めていただいている方々、本当にありがとうございます。御座います。

少しでもとっつき易さを出すために、ガールズラブ表記を一時外そうかと思っています。

本格的に描写が入ったら入れようかなと……。

どうなんでしょうかね、あれ、詐欺？

今後のためにもこの作品にはガールズラブ要素が出てきます。ご注意を。

とまあ、ようやく物語も本格始動と言った感じでしようか、街を出て、自分の正体もおぼろげながら分かってきたところ。

相変わらずの牛歩ですが、

ゆっくりと頑張っていきたいです。

ちなみにアイリーンは牛と言うか牛柄というか、牛乳が好きという設定。

服装にも常に牛柄が入ってる。

それではまあ、次回もよろしく願います。

感想もどしどしお待ちしております。

如実に後書きのネタが無くなっている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4588d/>

紅娘を潰して

2010年10月10日07時45分発行